

# 掬月居

この地がもつ特性や潜在的な力(エネルギー)を引き出し、住まいと自然が一体となった豊かな環境をつくり出す。



## 山間に行む終の棲処

自然と向き合いながら暮らすための終の棲処である。越前海岸から東へ入った山間にはどかな田園風景が広がる。そのような風景の一部にあるこの地には、小高い山の常緑と雑木の林があり、その存在を掘り所にしながら居場所を求め、安心して生活出来る終の棲処を計画していった。

この場所では単純で力強い、おらかな形のもがふさわしいと考え、大きな切妻屋根の家としている。この家を敷地の南側にある林へ、冬の日取りが得られるぎりぎりのところまで落せて配置し、自然と一体となった豊かな家をつくり出した。内部から見ると、家全体が林に開かれ、自然に抱かれている様な雰囲気をつくり出している。素材は地元で産する越前瓦や杉材そして、土壁等、全て自然素材を用いている。これは耐久性及び経年変化による美しさに加え、この場の風景にふさわしいものを選んで結果である。

今回は家と共に風景としての盛り上がり大きな課題であった。現状の地形を壊さず、少し手を加える程度にとどめ、この地の環境に調和したものでありたい。南の平坦な部分は山の裾に合わせて、ラウンド状の舞臺で見切ることでより平坦さを強調している。北側のアプローチ部分は、築山によって形づくり、築山の間に緩やかにカーブさせた入り口で道路と繋ぎ、変化に富んだ楽しいアプローチとしている。この地がもつ特性を引き出しその自然を掘り所として、風景としての家を表現しようと思った。

